

## 戦後作家の初期作品

平成6年1月24日(火)～2月25日(金)

今回の常設展示では、主として戦後に活躍した小説家を中心に、そのデビュー前後の作品を選んでご紹介します。それらの初期作品の中には、現在流布している改訂版と大きく内容の異なるものや、全集・作品集に収録されていない習作も多く見られます。それらを、最初に雑誌や単行本に現れた形で見てみるのも、興味あることではないでしょうか。

### 展示資料リスト

<>内は当館請求記号

#### 1. お紀枝

島尾敏雄 『科学知識』 1939年8月号

<雑26-6>

『こをろ』等の同人誌に書いていた頃の作品で、雑誌『科学知識』に懸賞小説の佳作として掲載されたもの

#### 2. 揚子江文学風土記

武田泰淳・小田岳夫 著

東京 龍吟社 1941 299p

<920.2-O218y>

『中国文学』に文学活動の拠点をおき、一連のいわゆる「中国もの」の小説を執筆するなど、中国文学に傾倒していた武田泰淳が、戦前に小田岳夫との共著で刊行した一冊。

#### 3. 中世

三島由紀夫 『文芸世紀』 1945年2月号

<Z13-4178>

第一小説集『花ざかりの森』刊行後、終戦を前にして発表された小説の第一部。「一億玉砕は必至のような気がして、一作一作を遺作のつもりで書いていた」(『私の遍歴時代』)

4. 暗い絵

野間宏 『黄蜂』創刊号 (1946年4月) <Z051.3-Ki4>

「戦後派作家の第一声であり、ある意味では戦後文学全体の第一声ともいうべき」作品(本多秋五『物語戦後文学史』)

5. 神々と神と

遠藤周作 『四季』第5号 (1947年12月) <Z905-Si37>

著者が24才の時発表した最初の評論。「『神々と神と』という題をつけたが、それは後に私の小説で中心のテーマになったものであった」(『私はなぜ小説家になったのか』)

6. 終りし道の標べに

安部公房 著

東京 真善美社 1948 236p (アプレゲール新人創作選8) <913.6-A132o-s>

7. 同

東京 冬樹社 1965 214p

<913.6-A132o>

冬樹社から刊行された改訂版は、旧版を全面的に改稿したもの。「この作品が、いまなお私の仕事をつらぬいて通っている、重要な一本の糸のはじまりであることを、否定することは出来ない」(冬樹社版「あとがき」)

8. 霧の中

田宮虎彦 著

東京 沙羅書房 1948 348p

<F13-Ta81ウ>

世評の高かった「霧の中」(『世界文化』1947年11月号)をはじめとする、著者の第一創作集

9. 薔薇販売人

吉行淳之介 『真実』1950年1月号

<Z905-Si13>

「この作品で、はじめて私は散文が書けた、とおもった」(『私の文学放浪』)という意味で、著者が自分の処女作と認めているもの

10. 虚空

埴谷雄高 『群像』1950年5月号

<Z13-180>

今なお書き継がれる大作『死霊』や初期評論『不合理ゆえに吾信ず』とともに、埴谷雄高の作品群の中核をなす短編

11. ガラスの靴

安岡章太郎 『三田文学』 1951年6月号 <Z13-26>

同誌の編集をしていた北原武夫に「これだけの素質を持った新人は、戦後の新人の中でも稀有に近いのではないだろうか」(同号「推薦の言葉」)と賞賛され、芥川賞候補作ともなった、著者のデビュー作

12. 或る「小倉日記」伝

松本清張 『三田文学』 1952年9月号 <Z13-26>

13. 同

松本清張 『文芸春秋』 1953年3月号 <Z23-10>

著者の芥川賞受賞作。『文芸春秋』に再掲の際は、後から更に手を入れたものを掲載してもらったらしい。文庫本等に収録されているのは、後者に掲載された方である。表現の細かいところまで推敲が施され、より正確で、完成されたものになっているのがわかる

14. 洋酒天国 創刊号(1956年4月)

<Z588.583-Y1>

当時、寿屋(現在のサントリー)の社員だった開高健が編集兼発行人をつとめていた、トリスパーのPR誌。創刊号刊行から2年後、開高は『裸の王様』で芥川賞を受賞した

15. 奇妙な仕事

大江健三郎 『東京大学新聞』 1957年5月22日 <Z99-185>

昭和32年度の五月祭賞を受賞したこの作品をきっかけとして、大江健三郎は学生作家として出発することになる